

---

# **マリオ・オールスターズ・レジェンド 【四聖獣伝説】**

美怜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マリオ・オールスターーズ・レジエンド 【四聖獣伝説】

### 【NNコード】

N5571M

### 【作者名】

美怜

### 【あらすじ】

世界の『属性』を司る神様が大地に降りる、100年に一度の『降臨祭』に呼ばれたマリオブラザーズ。

今回はワリオ・ワルイージの出番もあるらしい？

### 【注意！】

これはマリオシリーズを題材にした完全オリジナル作品です。そんなの絶対嫌！な人は『戻る』ボタンをクリックお願いします。

## ? はじまりの朝

あなたは、「神様になつてみんなを守りたい」と思ったことはありますか？

これは王国の英雄たちに宿り力を貸した、獣の姿をした神様たちの物語。

「こうづくさい  
降臨祭？」

赤い屋根の、質素な丸太小屋。

ある晴れた日の朝、兄弟の家に訪れたキノピオに、マリオは怪訝な顔でこう聞き返した。

そんな二人の様子を見守るよつに、マリオの双子の弟にあたるルイージは、二人の後ろで朝食の後片付けをしていた。

「ええ。今夜は、キノコ王国だけでなく……世界全体に満ちる『属性』を司る神様が、100年に一度大地に降りる夜なのだそうです」「ふうん。で、その祭にオレに出てほしいうて事か？」

名前からして堅苦しそうなものだが、お祭り騒ぎはマリオの大好きなもの。何よりキノピオたちが困っているのならば放つてはおかない。快く承諾しようとしたが、そこで何故かキノピオは言葉を濁した。

「あー、ええ……まあ」

「？」

マリオの疑惑の視線から逃げるよつに視線を泳がせ、「こによ！」によとキノピオは言った。

「実はマリオさんだけではなく、ルイージさんにも……」

「……えつ、ボクも？」

普段はマリオが旅に出ている間の留守番ばかりをしているせいで、マリオの影に隠れがちなルイージだが……今日は彼の役目もあるらしい。ぱっとルイージの表情が笑顔になる。

ところが、そこまで明かしておきながら、未だにキノピオの表情は優れなかつた。

「あ……いえ。ルイージさんだけではなく、その

「まだ何かあるのかよ」

「その……あなた達に言つべきことではないのですが」意を決したようにぱっと顔を上げて、二人の顔をまっすぐ見据えて。真剣なまなざしで、キノピオは言つた。

「ワリオさん・ワルイージさんのお二人にも、『出席していただきたいのです!』

一瞬、沈黙。

「「……えええええ……」「

「ひやつ」

止まつた時が突然動き出したかのように、兄弟は同時に驚きの叫びを放つた。キノピオがひっくり返る。

「な、何でのー人まで! てか、直接言えよ!」

「そ、その通りですよね。ですが彼らはおー人も知つての通り、問題の絶えない暴れん坊ですから、その。ええつと」

「……要するに怖いんだね。だからボクたちから伝言してほしいってこと?」

苦笑いと共にそう聞き返したルイージの表情を伺いながら、キノ

ピオは力なく「……ハイ」と頷いた。

あーあ、と、マリオは深いため息をついて立ち上がる。

「分かつたよ、オレたちから説明してやる」

その答えや彼の行動が。つまり、自らの自分勝手な願いを聞き入れてくれたんだと理解して。キノピオの表情が輝いた。

「ありがとう」<sup>ハジコ</sup>ます！

「心配すんな、田立ちたがりのあいつらの事だ。喜んで行ってくれるさ。さ、行こ」

「う、うん」

マリオに促されて、ルイージも慌てて立ち上がった。

キノコ城下町の裏通りに、人知れずそのあばら家はあった。

「おお！ ついにオレたちにも国々の声がかかるとはー」

「やつたぜ兄貴！ これでオレたちもヒーローだ！」

思った通り。ワリオ・ワルイージ両名は、一人の言葉を聞くなり、手を取り合って大いに喜んだ。想像通りの反応を見て、マリオもルイージも思わず苦笑いを漏らす。

「感謝しろよ？ キノピオが怖がるから、代わりにオレたちが伝言しに来たんだからな」

「はんっ。やっぱキノピオどもは臆病だなー。で、そんな臆病者の言いなりになつてお前らがどうしてもつて言つながら、

勝ち誇つたようにふんぞり返つてそつとワリオ。兄弟がむつと顔をしかめた。

「キノピオのこと悪く言わないでよ」

「けつ、事実だらうがよ。ま、お前らがどうしてもつて言つなら、堅苦しい挨拶とかもやつてもいいんだぜえ？ ヒツヒツヒ

ワルイージもけらけらと笑つてゐる。

マリオらにとつて正直気分がよくない事この上ないのだが、キノピオとの約束がある。これ以上の押し問答の上、へそを曲げられて

「出ない」と言われては困るのだ。

仕方なく、マリオは一人の顔をじっと見据えた。

「頼むから、出てくれよ」

「……ほほーう。お前もなかなか礼儀正しくなつたじゃねーの」

満足そうにジグザグ髪を撫でながらそう言つて、ワリオは勢いよ

く、今までふんぞり返っていたソファーから勢いよく立ちあがつた。  
「気に入つたーー！！ 降臨祭だかチングンサイだか知らんが、今日  
からスーパースターの座交代だつて世界中に知らしめてやろうじや  
ねえか！ 行くぞーーー！」

「おう、兄貴ーーー！」

「なつ、おいーーー！」

マリオが引きとめるのに耳も貸さず、意地の悪さに秀でた兄弟た  
ちは、勢いよくあばら家を飛び出して行つた。

「……祭は夜からだつづーの」

「ま、まあやる氣は有り余つてゐみたいだし。出でくれてよかつた  
ね」

「正直、予想以上の食いつきの良さだつたけどな  
お互い顔を見合わせ、苦笑い。

「さあ、ボクたちも夜に備えて準備しなくつちやー！ いつたん帰ろ  
う」

「そうだな」

頷きあい、兄弟は誰もいなくなつたあばら家を後にした。

祭は、今夜。

さあ、一体何が起つる？

?

## 降臨祭

あつと黙つ間に時間は過ぎて。

空に星たちが見え始めた頃、ピーチ城前の広場には、町じゅうのキノピオたちが集まり、王国を治める美しき姫君が現れるのを、今か今かと待ちにしていた。

バルコニーに備え付けられた舞台の下で、椅子に腰かけたマリオらは、階下にひしめき合つキノピオたちの姿を眺めていた。……約2名は、すさまじくだらしない姿勢だったが。キノじいらが迷惑そうに顔をしかめるのにも、どこ吹く風である。

だらけきつた二人の姿に苦笑いしつつ、普段どおりの桃色のドレスに身を包んだ金髪の女性……ピーチ姫は、マリオ・ルイージ兄弟の前で表情を曇らせていた。

「二人とも。突然こんな事を頼んでごめんなさい」

「いいえ、お構いなく。祭は大好きですから！」

「ありがとう。そう言つてもらえると嬉しいわ」

マリオの言葉を聞いて、ほつとしたように微笑を浮かべ、ピーチは言った。そんな彼女の視線が、兄弟の後ろですっかりリラックスしている一人組のほうにちらちら向けられているのを、マリオは見逃さない。

「……あんな。ふんぞり返るのはともかく、鼻くそほじるのはやめろよ。姫の目に毒だ」

「そ、そうだよ。行儀悪すぎだつて」

「ああん？ オレ様たちはこれから降臨祭の主役になるんだぞ。どうしよう」とオレ様たちの勝手だらうが

「そういうこいつたい。主役にやる気出して欲しいなんうだうだ文句言つんじゃねーぞ、桃姫さんよお」

マリオたちの言葉に、悪びれる事もなく堂々と言い放ったふたりの台詞を聞いて、キノじいの顔がたちまち真つ赤になつた。

手に持つていた杖を振り上げて、ワリオ突っ込む勢いである。

「何と失礼な！ 主役は他でもない姫様ですぞ！ 姫様のお心に感謝しないばかりかそのような暴言を！」

「わわ、キノじい落ち着いて！」

慌ててルイージがキノじいの前に立ち上がり、肩を押されてどうにか落ち着かせようとする。

どうにか乱闘は避けられたものの、キノじいはふうふうと荒い息使いで、敵意をむき出しにした視線をワリオに向けていた。前途多難である。

ワリオとワルイージの様子をつかがいながら、ルイージはそっと声を潜め、キノじいに尋ねた。

「……こんな事になるなら、あの一人呼ばなきやよかつたのに。どうして呼んだの？」

「はあ、それが……」

ルイージの言葉に苦笑いしつつ、説明しようとキノじいが口を開いた時。

城壁の上に立っていたキノピオ兵士たちの吹き鳴らすラッパの音が、広場に鳴り響いた。広場から歓声が上がる。

「……仕方ありませんな、説明は後ほど。さあ姫様、参りましょう」「ええ。それじゃあ皆さん、また」

「「はい」」

大きくマリオとルイージが頷いたのに微笑み返して。ピーチはキノじいに手を引かれて、舞台上がつて行った。再び広場から大きく歓声が上がる。

キノじいにマイクを手渡され、ピーチは舞台の真ん中に立つ。

「皆さん。今夜は私たちの為に……そして何より【四聖獣】様の為に来て下さつて、本当にどうもありがとうございました」

「……四聖獣？ 属性の神様つて奴の事か？」

「……そうみたいだね。動物の姿をした神様なのかな」

舞台の外に声が漏れないように、マリオとルイージは顔をつつき

呑ませてひそひそと声を潜める。ワロオとワルイージのほうは、そんなものには全くもつて興味はないらしい。「出番まだかよー」と、退屈そうにひきつけられてくる。

「これから先、王国が……そしてすべての世界が、大いなる属性の加護にあるよう。今ここに、四聖獣降臨の儀式を執り行います」そう言つてから、ピーチはキノじいにマイクを返し、一歩前に出て。

よく通る声を上げ、ここにいる全ての人間に届くように、唱えた。  
「氣高き『火』よー!」

細身の体から、こんな良く通る声がでるものだらうか。決して騒々しくない声が、耳に心地いい。

と、マリオがそう思つていた時だった。

ピーチの声に応えるように、舞台上に。炎のように赤く輝く何かが、どこからともなくぱっと現れたではないか！  
それを見て、思わずマリオは立ち上がる。

「こ、兄さん？」

「おこおこ、びびしたよ。今になつてあがつたか？」  
弟の声も、自称ライバルの声も、まるつきり耳に入らないまま、マリオは立ち去くして。

ただ、舞台の上でゆりゆり揺れる赤い光を、じっと見つめていた。

どうしてあんなにドキドキするんだろう。

あんなもの、見たこともないのに。

……こや。

だからこや、なのか……？

「じゅせ、姫さんの魔法か何かだらー。なーにを驚いて……」  
「穢れなき『風』よー!」

ワルイージがそう毒づく間にも、儀式はどんどん進行していく。

次のピーチの声と共に、またしても舞台の上に何かが現れる。

澄んだ緑色に輝くそれを見て、今度はルイージの目の色が変わった。

「お、おーおー……お前まで、何を……」

「……何でだらひ、兄さん」

ゆっくり立ち上がって、兄の側にそつと歩み寄って、声をかける。  
「何だか……戦いなんて起きてないのに、すこく力があふれる気がするんだ」

「……うん。オレもそうだよ」

弟の言葉に、静かにマリオが応えた、その時だった。

ドオオオオン！－！

『！－？？』

遠くの方で爆音が響いた。小さく悲鳴も聞こえる。  
反射的に4人は舞台の上に駆け上がった。そして……絶句した。  
空の上には、見なれた飛行船。船の上に掲げられた黒い旗は、毎度おなじみの怪物の顔を模したもので。

4人の顔色が変わった。

「クッパ……！－！」

「つたぐ、こんなときにまで来やがるか！　あんの大魔王様はよお！－！」

息を呑むマリオに次いで、ワリオが悪態をつく。  
またしても攫われてしまつてはいけない。4人はピーチを取り囮むように立つた。

「姫、お怪我はありませんか！？」

「おいおい、オレらの出番もまだねえうちに何の騒ぎだよー！？」

「ああ、みなさんー！」

ルイージとワルイージの呼び声で、金髪を振り乱して振り返り。  
傷一つない4人の姿を見て、ピーチはほつと安堵の息を漏らした。

「まだふたりしか召喚出来ていませんが、……」この事態です。仕方ありませんわ」

「……は？ 召喚？？」

4人の頭に疑問符が浮かぶ。

先程の彼女の行動の事を言つてていたのだろうか。

「マリオ、ルイージ！ そこに浮かんでいる光に……」

何が何だかわけが分からず首をかしげる4人に向かって、ピーチがそう言いかけた時だった。

「見つけたぞ！ 紅朱雀！ 鳳凰白虎！」

雄叫びと共に、船の船首に現れたのは、まさかれもなく。「クッパ！！」

マリオの叫びに応えることはなく、クッパは……マリオらではなく、舞台の上でふわふわと浮かんでいる一色の光に目を向けていた。「こんな小娘の力などを借り、ちまちまと我が復活の邪魔をしあつて。しかし、今年は間に合わなかつたようじゃのう？」

「……復活？」

彼の言つ言葉の意味が分からず、またしてもマリオらは首を傾げた。

口調も、彼がまとう気配も、普段のクッパとは違う気がする。戸惑う4人をほつたらかしにして、クッパの勝ち誇ったような言葉はまだ続く。

「黄金玄武と紫苑青龍はまだ居らぬか。ならば好都合！ まずは貴様らの魂、粉々に散らしてくれる！！」

「……っ、マリオ！ ルイージ！」

来るか、と、4人が身構えた時。ピーチがマリオとルイージに向かつて、真剣な眼差しで呼び掛けた。

「二人ぶんしか用意できませんでしたが、今は仕方ありません。今すぐ、そこの光に触れて下さい！」

「……え！？」これにですか？」

「な、何故今そんな事を！ それより今はクッパを追い返さないと

……」「…

「いいえ、今でなくてはいけないのです！」

「……、わ、分かりました」

本音を言えばこのままクッパに飛びかかつて行きたいのだが、彼女のそんな真剣な眼差しを受けてはとても断れない。慌ててマリオは頷いた。

ちらりと、自分たちのことをライバルと呼ぶ、しぶとい悪友の姿を振り返って。

「お前ら。オレたちに何が起るか分からぬ。姫を頼むぞ」「けつ。オレ様のライバルがそんな弱気なこと言つてんじゃねえよ」「おう。サンキュー」

鼻をいじりながらそう毒づいた悪態を、快い承諾だと勝手に解釈して、マリオはそう言つてにかつと笑つた。

弟が不安そうに、緑の光の前でじっとマリオの顔を見つめる。

「に、兄さん」

「なんだ、怖いか？ ジャあ、まずはオレだけ触つてみる」

「え！？」

「その後の展開を見て、大丈夫そつだと思つたら、お前も触れ。いいな？」

「う、うん」

「姫。それでよろしいですか？」

「……あまり期待通りではありませんが、あなた達に任せます」

ピーチの返事に少し安心しつつ、頷いて。改めて、マリオは赤い光の前に立つた。

……姫が、こいつを呼び出した時。

ルイージの言った通り、オレは理由の分からない妙な高揚感に襲われた。

それが良い事なのか悪い事なのかは、分からぬ。これから起ることも、何もかも。

クッパは、この光に向かつて『紅朱雀』って呼んだ。きっとそれが『四聖獣』のうちの名前なんだ。

「」の中に、その神様の魂があるつていふのなら。

お願い。

今だけでもいいから、オレに姫を守れるだけの力を……

「よしひ！…………つ！」

意を決し、マリオは赤い光の中に、白い手袋をはめた手を突っ込む。

燃え盛る炎のようすに真つ赤な光が、ぱあっと弾ける。  
それこそ、目も開けられないほど、鮮やかに、眩く……。

「ぬわあつー？」

「おいおい、やつぱマズかつたんじゃねえのかつ！？」

「兄さんあんつ……！」

仲間たちの声もどこか遠くに聞こえて。

心地よい熱の中で、すさまじい力が、胸の奥からどんどん湧いて

くるのを、マリオは感じていた。

それは、大きく大きく膨れ上がる。自分の力だけでは、とても抑えきれないほどに、強く。

「う、ぐ……うああああああつ……！」

堪えきれない叫びと共に。

ゆつくり、ゆつくり。

意識が、遠ざかる……。

「兄さん……！」

「マリオ！？」

「おい、赤野郎！！」

大きな悲鳴を上げたかと思えば、突然がっくりと膝をついてしまったマリオの側に、残された3人はたまらず駆け寄った。ピーチだけは、彼らの行動を見守るようにじっとその場に立ち尽くしていた。やがて、マリオはゆっくりと立ち上がる。心配する3人の手を振り払って。

その瞳は、目の前で「王立ちしているクッパへの憎悪に燃えていた。

「……随分勝手なことをしてくれたな。黒金大蛇」

To be continued.

？ 紅朱雀

普段の彼とはまるつきつ違つたの言ひ回しで。

今、彼は何と言つた？

3人とも、その意味を理解出来ずについた。

「くろ……あんだつって？」

「……兄さん」

ワリオが首を捻る傍で、ルイージはただその場で硬直していた。だつて、いつもの彼とは明らかに違つたから。口調だけではない。彼がまとう雰囲気そのものが。

バルコニーの手すりの上に飛び乗り、しつかりとクッパの顔を見据え。マリオは静かに、自分を見下ろす『魔王』と、普段の彼等らしからぬ言い回しの会話を交わしていた。

「我ら四聖獣が揃わぬうちに復活してしまつとは。やはり今までの『器』では、我らの魂を担うほどの度量は無かつたということか」「くくく……全くだな。在りし日の力はこれまでで皆無に等しかつた。我を戒めていた封印も、日に日に弱つておつたわ！」  
「だが、それももう終わりだ」

「……何？」

怪訝な顔をし、クッパが聞き返す。

自分の体を満足そうに見下ろして、マリオは言った。

「こ奴は今までとは違う。我が『火』の力が身体によく馴染んでおる。今にこの『器』は完全に我が魂の支配下に置かれ、今まで最大の力を發揮するだろつ。その時が貴様の最期だ、黒金大蛇」

「何だつて！？」

その爆弾発言に驚愕し声を荒げたのは、クッパではなくルイージた。それに少しの疑問を抱き、マリオはルイージのほうを振り返つ

「何だ、貴様は。何故貴様が驚愕する」

「兄さんを……どうしたの」

「何? ……ああ、なるほど。貴様はこの『器』の血縁者といつこ

とか。そして……翡翠白虎の『器』」

納得したように数回大きく頷いて見せ、マリオは人を嘲るような不快な微笑を浮かべた。それこそ、つい先ほどまでの彼ならば、絶対にその顔に出ることはなかつたもの。

「どうした、何をしている。貴様も選ばれし者ならば早く翡翠白虎と共に鳴をしろ」

「ボクは『兄さんをどうしたの』って聞いてるんだ!」

「……」

自分の命令をぴしゃりと跳ね付け、同じ質問を繰り返す。その確固たる姿勢を見て、マリオは……いや、紅朱雀はふん、とその凜とした姿を、軽々と鼻で笑いとばした。

「話にならん。『器』は『器』らしくその役目を全うするべきだというのに」

「兄さんっ!! ねえ、返事をしてよ兄さん!!」

「さあ、黒金大蛇よ」

必死に呼びかけるルイージの声には耳も貸さず、紅朱雀は頭上のクッパをキッと睨みつける。……その直後。

紅朱雀の魂を憑かせたマリオの体に、ふわりと赤い揺らめきが見え。

そして、次の瞬間。彼の背中には、不死鳥を想わせる紅蓮の翼が煌々と輝いていた。

「数多の罪を犯した貴様の魂……その身体ごと滅する! 覚悟せよ

!!」

迷うことなく、空中へ足を踏み出す。背中に現れた翼を器用に操

り、紅朱雀は一気に空飛ぶ帆船の近くまで舞い上がった。

「くくく……来い! 貴様一人で何が出来る? 翡翠白虎に貴様の死にざま見せつけてくれようぞ!」

クッパも立ち向かう。

船の上で、激戦が幕を開けようとしていた。

「……お、おいテメエ」

黙つてふたりの険悪なやり取りを見ていたワルイージが、恐る恐る俯いているルイージに声をかけた。

「テメエも、あいつが言つてた『共鳴』つてのしてよお、加勢したほうが……」

「嫌だよ」

答えはすぐに帰つてきた。

「おいっ！」

「嫌だよ！ あんな奴に加勢するなんて！！」

ぱつと顔を上げ、ライバルを睨みつける。兄と同じ青い瞳には、うつすらと涙が滲んでいた。

「君たちに分かる？ 血を分けた兄弟があんなにも豹変してしまつたことがどんなに辛いことか！ 君たちに、今のボクの気持ちが分かる！？」

「ルイージ……」

「このままあいつの意識に呑まれて、兄さんが消えるのは嫌だ。でも、兄さんを消してしまおうとしているあいつに協力するなんて、もつと嫌なんだよっ！！」

ピーチが悲しげに顔を歪めている。

姫を守るために、自らの意識を消されようとしている兄。それを黙つて見ているしか出来なかつた弟。

彼の悲痛な叫びがバルコニーにこだまする。

「ボクだって……どうしたらいいか分からんんだよおつ  
ぽろぽろと涙が零れる。

行き場のない怒りと悲しみは、定まらないままぐるぐるとバルコニーを駆けずり回る。

「君たちがやればいいじゃないか！ これは、何もボクだけが出

来る事つていうわけじゃ……」「

「そいつあ……そいつあ違うだろ？！」

そんな流れをせき止めたのは、紫の服を着た細身の男の一喝だった。

はつとルイージが、途切れることなく混乱の叫びを発していた口を閉じる。

「そりや、オレ達は実の兄弟つてわけじゃあねえ。だからこそ、赤野郎を正気に戻す役目はテメエにしか出来ねえんだよ！ それにその縁の光に触れたからって、完全にあいつの味方になつまうとは限らねえだろ？！」

激情を心のままに唇に乗せ、ワルイージは一気にまくしたてる。

「……ワルイージ」

「心配すんな。馬鹿正直なテメエのこいつた。心まで悪役にはなりきれねえさ。赤野郎がクッパを殺しちまつ前に、一発ぶん殴つてやれよ」

最後の台詞は、妙に優しかった。が、その言葉は紅朱雀の言った言葉の意味をありありと見せつける。

『身体ごと滅する』兄の体を借りた奴は、そう言った！？

「……駄目だよ。やつぱりこの光はまだ触れない」

「あん？」

「兄さんを元に戻すのは、ボク自身のやるべき事だから

そう言つて、ルイージは強くバルコニーの床を蹴り、一気に空高く跳躍した。

緑の服を着た体はみるみる上昇し、あつといつ間に紅朱雀とクッパがいる船の浮かぶ高度にまで達する！

意外な登場に、切り結んでいた一人も驚きのあまりに固まった。

「なつ、貴様は！？」

「兄さああああんつ！？」

「兄さああああんつ！？」

紅朱雀が何かを言つよつ早ぐ。

優しい弟は、兄の体に思い切り抱きついた。

「お、おいつー！」

「無茶しやがるなあ……」

「ルイージー！」

3人の声が遠くに聞こえる。随分高いところまで飛んだんだな、と、必死にしがみ付く中で、ルイージは思つた。

「な、何をする！ 邪魔だ、離せーーー！」

「嫌だ、絶対離さない！ ……兄さんーーー！」

今手を離せば、自分は遠く離れた地面にまつさかさま。それに何より、声がマリオに届かない。

自分の思いのたけ全てをぶちまけるよつて、ルイージは必死に呼びかけた。

「ねえ、聞こえてるだろーー？ ボクだよ、ルイージだよーー！ お願

いだ、返事をしてえーーー！」

「ぐつ……うーーー！」

何故だ。

今までで最高の共鳴率を誇つていたというのーー。

何故、定着しかけていた精神が、揺らぐ？

「…………う。ルイー…………ジ？」

「！！ 兄さん！？」

かすかに聞こえたその声を、ルイージは聞き逃さなかつた。ああ、いつもの声だ。少しだけだけれど、戻ってきた！

頭ががんがんする。

さつきから頭の中でわめくのは、ついたままで自分の体を借り、

許し難い行為をしていたもの。

彼は関係ない人物」と、誰かを滅ぼしてしまおうとしていた。そして何より、自分の家族を傷つけた！

(邪魔をするな……『器』の分際で……！)

「そいつあ悪かつたな。でも家族が呼んでたら……答えないわけにはいかないだろ！！」

(……くつ)

「安心しろ、消え去れとは言わない。せめてオレの中で大人しくしてろ……！」

紅朱雀の意識が消えた事を現すかのように。

マリオの背中で輝いていた翼が、突然消え去った。

それと同時に、二人の体は重力に引かれ、がくんと落下を始める。

「うわあああっ！！」

「おいつ！！」

反射的にワルイージが駆け出し、細身の体を精一杯のり出した。

「手え、伸ばせ！！」

「う、うんっ」

反射的にマリオと手をつなぐ体制を作り、ワルイージの伸ばしていく手に向かって精一杯手を伸ばす。伸ばしあつた手と手は近づき、やがてしっかりと握られた。

「おい兄貴、手伝え！」

「お、おうっ」

声もなく彼らの行く末を見守っていたワリオが、慌ててバルコニーに駆け寄る。

一人がかりで、兄弟の体はどうにかバルコニーの上に引き上げられた。

4人はぜえぜえと肩で息をする。心配そうにピーチが4人の顔を覗き込む。

「あの、大丈夫ですか……？」

「Jの様子を、見てつ、大丈夫に、見えんのかつ、てめえはつ！」  
「はあはあ……いいんだよ、ワルイージ。無事だつたんだもの」

「……ルイージ」

そつと、しつかりついでいた手を離す。それと同時に。  
突然、ルイージは思い切りマリオにしつかりと抱きつかれた。  
「ごめんな。あいつを通して、見てた。見てただけで、何も出来なかつた」

あいつと言つのは、言つまでもなく紅朱雀のことだらう。

肩が小刻みに震えている。

涙を必死にこらえているのだろう。

「いいんだよ、兄さん」

戻つてくれたのが嬉しくて。それに何より、兄の想いが嬉しくて。

そつと、兄の体を抱きしめ返した。

「こうして、戻つてくれたんだから」

「……おい。感動の再会はいいけどよお」

ワリオが唇をとがらせつつ話に割り込んできた。突然恥ずかしくなり、ふたりは慌ててお互いの体から離れる。

「な、なんだ？」

「紅朱雀が消えちまつただけで、事態は全く解決してねえんだが」

そう。

彼らの頭上には、まだあの彫まわしき帆船はあったのだ。

## ? 去りゆく魔王

「……とんだ茶番を見てくれたな。貴様ら」空に浮かぶ帆船の上で、4人がいるバルコニーを見下ろしながら。そう、クッパの体を借りた何者が吐き捨てる。

マリオが、見なれた魔王の『ごつい』顔を睨み返した。

「黒金大蛇、とかなんとか名乗つてたけど。あんた、一体何者だ」「それを知りたいのか？ もはや消えゆく運命にあるといつ貴様らが」

「へつ、そう簡単に消されちゃたまんねえよ」

ワルイージが負けじと言い返す。

面白い、と、大魔王の体で、黒金大蛇は意地の悪い笑みをこぼす。

「ならば、四聖獣に聞くがよい。我がわざわざ説明してやるまでもないわ」

「ああん？ 逃げんのかよテメエ」

「フン、そんな安い挑発には乗らん。……緑の男よ

「……っ」

名前では呼ばれなかつたが、単語で自分の事を呼ばれたことが分かつて。無意識に、ルイージはぶるりと肩を震わせた。

「お前も選ばれし『器』ならば、その役目を全うして我と戦うべきではないのか？ 激情に駆られて紅朱雀の意識を『器』の中に押し込めてしまつとは、何たる愚行か」

「……ぼ、ボクは」

「我是四聖獣どもとしか戦つ氣はない。揃つたら、首を揃えて我が祖国へ来るがよい！」

そう高らかに宣言した時。帆船が、くるりと方向を変えて動き出した。

方角的に、そちらの方向は王国を出て、海を越えてしまつ。

「ま、待て！－！」

「また会おうぞ、『器』じもーー！」

4人の跳躍力をもつてしても、あそこまで引き離されてしまつてはもう、船の上までは届かない。

高笑いと共に、帆船は豆粒のように小さくなつて行つてしまつた。

「……それで、だ

ところ変わって、ここはキノコ城の客間。

キノピオに出された紅茶を囲んで、ピーチに見守られながら。4人は難しい顔をしていた。

「これからどうする？」

「そりゃあ、クッパを追いかけるに決まつてんだろ」「どうやつて？ どこに行つたかも分からぬのに」

「四聖獸ゆかりの地つてのはねえもんかね」

「姫、何か御存じありませんか？」

「そうですね……」

唐突にマリオにそう尋ねられて、ピーチは過去の記憶をどうにか思い出そうと、口を開じてじっと考え込んだ。4人はただ黙つて彼女の様子を見守る。

やがて、深い深いため息が、ピーチの口から洩れる。

「……ごめんなさい。私には分かりません」

「そうですか。お気になさらず」

「そう言えば、奴は『四聖獸に聞け』って言つたよな？」

思い出したように、ワリオがマリオとピーチの間に割り込んだ。顔をしかめながらも、マリオは「ああそうだつたな」と、彼の言葉に相槌を打つ。

「だが、どうやつて聞く？ 紅朱雀はもういるかいないか分からないのに」

「え、ええっ。ひょつとしてボク、取り返しのつかない事しちやつたのかなあ」

「いや、まだいるだろ」

するするするする、と、盛大に音を立てて紅茶をすすりながら、ワリオがいきなりのんびりと言った。

一同の視線が一気にそちらへ集中する。

「緑の光がまだ残ってる。あーっと、名前なんだっけか、姫さん？」

「翡翠白虎、ですか？」

ピーチが、バルコニーの外でぽんやりと浮かぶ緑の光にちらりと目をやりつつ、聞き返す。

「おう、そいつだ。ルイージがそいつになつやあいい」

「……えつ」

びくりとルイージが固まる。

自分も、つい先程までの兄のようになってしまつたのだろうか？  
愛情のかけらもないその言葉で、誰かを傷つけるようになつてしまふのだろうか？

一度でもそう考えてしまつと、とてつもなく怖くて。とても、肯定の返事を返す事など出来なかつた。

と、その時。

「……大丈夫。心配すんな」

俯ぐルイージの肩に、マリオの手のひらがぽんと乗せられて。  
はつと顔を上げてそちらを向くと、優しくほほえみをこちらに向け、最愛の兄の姿があつた。

「お前に何かあつたら、さつきのお前みたいに、オレが全力で止めてやるから」

「……兄さん」

「な？」

何でだろ？。

兄さんの言葉は、いつもボクに絶対の自信と勇気をくれる。

小さいころから今まで、それはずっと変わらなかつた事で、だからこそボクたちはお互い変わる必要はなかつた。

そりやつて兄さんが背中を押してくれるから。兄さんが、ボクにだけ助けを求めてくれるから。

こんな臆病なボクでも戦える。

お化けが出そうな所にだつて、どんな怖い所にだつて行ける。何だつて、出来たから。

それは、今だつて……。

「……、うん。分かつたよ」

意を決して、ルイージはすくと立ち上がつた。

「やつてみる」

「おうおう、それでこそ我がライバルの弟だあ」

「兄貴。いい具合に『永遠の2番手野郎』に面倒事押しつけよつとしてるな?」

「何の事かな弟よ? はつはー」

「……実の兄を目の前にして随分な言い草じゃないかお前ら」

「いいんだよ、兄さん」

悪友たちの実に失礼すぎる会話を聞いて、危うく殴りかかろうとしていたマリオを、ルイージのやんわりとした言葉が押しとじめる。「いいんだよ、『永遠の2番手』でも。ボクの1番はいつも兄さんなんだもの」

そんなマリオが、また元気づけてくれたから、今度も自分は大丈夫。

さあ、全ては手がかりを得るために。  
自分の体を、四聖獣に差し出そうではないか。

自分の目の前には、ぼんやりと淡い光を放つ緑色の力の塊。

先ほど大口をたたいてしまったものの、こうして目の前にしてみると、どうしても無意識に体が震えてしまつて。

そんな往生際の悪い自分自身を、ルイージは心の中で叱咤した。  
(しつかりしる、怖がつてどうする！ みんながいるんだ、大丈夫に決まつてるだろ！)

「ルイージ？ 怖いんなら、心の準備が出来てからでも……」

「大丈夫だよ」

マリオの言葉を遮り、震えそうになる言葉を必死に抑えて、振り返らずにルイージは言つ。

「大丈夫。だから、兄さんは何も心配しないで」

分かつてゐる。

自分はいつも助けられてばかり。

だから今度くらいは、兄の手を借りなくとも、自分の意志で。

どうしようもない恐怖を、振り払え！

兄が、自分の悪友が、兄の悪友が、兄の愛する姫が。それぞれの面持ちで見守る中。

「…………」

一気に、光の中に手を入れた。

To be Continued .

田の前が緑色に塗りつぶされていく。

弟が光の中に手を突つ込んだ次の瞬間、マリオはそんな風に思つた。

かすかに聞こえるのは、荒れ狂う風の音と轟く雷鳴。

弟が潜在的に持つサンダーの力と、互いに引き合つてこるのであるか。

「ううっ、あ……！」

雷が身体を焼き焦がすような、そんな苦痛の声で。はっとマリオは我に返り、慌ててルイージの側に駆け寄りつとする。

「ルイージっ！？」

が、自分が足を踏み出そうとするより早く。

「来ちや駄目……っ！ ボク以外は、駄目だー！」

ぴしゃりと、痛みを必死に堪えるようなルイージの声に遮られる。彼自身の確固たる意志を汲み取り、マリオはそれ以上そちらへ近づこうとはしなかった。

(「そうだよ、な。この苦しみは、何より一番オレが分かつてる」)

それはそうだ。自分は、つい先程この現象を、身をもって体験しているのだから。

(「でも……それをオレは、黙つて見ていられるのか？」)

「おっこ、マリオ！－！」

いきなり後ろから怒鳴られ、素早くマリオは振り返る。撫然とした顔をしたワリオが、こちらをジト目で睨みつけていた。

「てめえがあいつに『大丈夫』って言つたんだろうが。せつそく前言撤回してんじゃねえよ

「……そうだったよな。すまん」

「けつ。てめえに謝られるなんざ、慣れなくて反吐が出らあ」

憮然とした表情は崩さないまま、ワリオは唇を尖らせてこいつ返し

た。

声が、聞こえる。

(そなたは、優しい男だ)

「う、……？」

(紅朱雀が悪い事をした。奴に代わって詫びよつ)

雷に身を焦がされ、烈風に身を斬られるよつた感覚を全身に浴びながら。

ルイージは、痛みに歪む顔をゆっくりと上げた。……当然だが、誰もいない。緑色に輝く圧倒的な力の束と、自分たちの危機など知る由もない星空があるばかり。

そんな荒れ狂う空間の中で聞こえるその声は、威厳あふれる中でどこか穏やかなものが見えた。それは自分の周りにある雷と風の激しさからは、とても想像がつかないもの。そんな口調と言いまわしの中に、ルイージはほんの少しだけ兄・マリオの面影を見た。

(奴めも驚いてたようだが……)ここまでわしの力に近い素養を持つての奴は、そなたが初めてじゅ。黄金玄武も紫苑青龍も、きっといい奴に遇到了うに。それがまさか間に合わなかつたとは……)

「何を……言つてるの？」

(少しばかりそなたの体、借りるぞ。案ずるな、後ほどしつかりそなたに返してやる)

「ねえ、だから何を……ツ！？」

噛み合わない会話に若干苛々しながら言い返そうとした次の瞬間。胸の奥から、何やらすさまじい力が溢れだすのを感じ、思わずルイージは胸を押されてその場にうずくまつてしまつ。

心が擦り減らされるような感覚。意識がどんどん遠ざかる。

(兄さんも……こんな感覚を味わっていたんだね)

皮肉めいた笑みをぽろりと零して、ルイージは目を閉じた。

荒れ狂う力が静まり、自分の中にすっと収まって行くのを感じながら。

光が収まつた。

先ほどまでの荒れようが嘘のように静まり返つたバルコニーには、ルイージがただ静かにその場でうずくまつてゐるだけで。

ひょっとして失敗したのだろうか。恐る恐る、マリオは弟の背中に声をかけた。

「……ルイージ？」

「いるのだろう？ 紅朱雀」

『！？』

マリオの呼び掛けに応えるより早く、ルイージはしつかりと立ち上がつてこちらを振り返つた。

声や姿はルイージのままなのに、その時点では彼のまとう雰囲気は、がらりと変わつていて。氣品とかそういう現実的な部類を通り越して、神々しいほどに。その雰囲気を見て、ワリオとワルイージは、つい先程のマリオの姿と今のルイージの姿を、思わず重ねていた。いや、違う。今のは『ルイージ』ではない。

ピーチも言ったその名前。あの場で彼女が呼びだす事の出来た、もう一人の四聖獣。翡翠白虎だ。

戸惑いながら口を開いたのは、ワルイージだつた。

「く、紅朱雀は……消えちまつたんじゃねえのか？」

「分からぬのか？ 『器』が意識を無理やり押し込めようとしたおかげで、『器』自身の能力そのものに定着してしまつたのじや。まあ無理にそうしようとせんでも、わし等がやろうと思えば簡単に出来てしまうのだが

「えーと……」

「つまり、今も紅朱雀は『器』の中におり、わしらの姿を見ている。そういうことだ。とんだ無駄骨だつたのう」

そう言つてカラカラと笑う。3人はただその場に立ちつくして呆然とするばかり。

自分自身、何度かの冒険でそういう非現実的なものに出くわして

いふとはいえど、やはりそう簡単に信じられる事ではないのだ。

言葉を失つてゐると、翡翠白虎はマリオのほうに視線を向け、意地の悪い笑みを浮かべて見せる。それこそ本来のルイージならば、ほぼ絶対に浮かべる事のない表情だった。

「それならば、わしの声が聞こえないはずはないじゃん？……

紅朱雀、表に出て來い

「表？……」

「……うつ？」

またしても聞きなれない言葉を発し、皆が疑問符を浮かべたその時。突然、マリオが胸をおさえながら、その場にくず折れたではないか！

慌てて悪友義兄弟が彼の側に駆け寄つた。

「おい、なんだ？ いきなりどつした！」

「マリオ！？」

「……しばりくの間に随分意地の悪い性格になつたものだな。翡翠白虎よ」

先ほどの苦しみようが嘘のようにすっくと立ち上がつたマリオが、静かにそう言つ。冷ややかなその言い回しの単詞を聞いて、ワリオもワルイージも驚愕した。

「な、その口調！ 紅朱雀のつ」

「何を驚いている。我があの程度で消えるとでも思つたか

「いい加減『器』に喧嘩を売るのはやめぬか、紅朱雀」

涼しい顔で言い放つ紅朱雀をぎりりと睨みつけ、翡翠白虎がたしなめる。

「今が万に一つの非常事態だということぐらい、そなたならば分かるじゃろ？ いい加減その人間嫌いを直せ」

「我に人間を好きになれとでも言つのか、貴様は？ それこそ万に一つもあり得ない事象だ」

「つておいら！ 僕たちのライバルの体使つて喧嘩すんじゃねえよつ」

ワリオが、険悪なムードが漂い始めたふたりの間に割り込んだ。

ワルイージもピーチも、ふたりのほうを憮然と睨んでいる。

ぐつと言葉に詰まつたように顔をしかめる紅朱雀。翡翠白虎は「それみる」と小さく呟き、ワリオらの方に向きなおる。

「……今日という祭りの日に、このよつた事になつてしまつて、誠に申し訳ありません。あなた方のお怒りももつともです。しかし」今までずっと黙つて様子を見守つていたピーチが、ゆっくりと顔を上げ、ふたりのほうをしつかり見据え、言った。

「今回の事件をおさめるには、あなた方だけではなく、他のふたりの四聖獣のお力も必要となります。あなたがたの肉体が眠る地につけじ」存じありませんか？」

「ほう。それでわしは一足遅れてそなたらの前に現れたといふことか」

納得したように大きく頷く。

一呼吸おいて、翡翠白虎は再び口を開いた。

「わしらの故郷と言える国は、ここよりはるか東にある。『源國』<sup>げんこく</sup>と呼ばれ戦に明け暮れておつたあの国も、長い年月を経て戦も終わり、国の名も変わつてしまつた」

「ふん、過去を忘れようとするのは人間どもの悪い癖だ。……今は『オリエント王国』とかいう名前になつてしまつたようだな」

遠い昔を懐かしむように手を組める翡翠白虎に続き、紅朱雀が静かにそう吐き捨てた。

数秒ほど考え込んだ後、ワルイージは「あーー」と、思い出したように両手を打ち合わせた。

「あの変わつた服着た連中の国があ。前に町の本屋からネゴババした雑誌に書いてあつた気がするぜ」

「……わ、私もキノじいから聞いたことがあります。私たちと比べると、やや特殊な文化を持つていいようですね」

聞き捨てならないセリフが混じつていたような気もするが、罰するの落ち着いた後でもいいだろう。そつ勝手に結論付け、ピーチも頷いて彼に賛同した。

「そこに行けば、残つたふたりに会えるのか?」

「ふん、貴様らだけが行つてもどうにもならんわ。たわけ」

「たとえ我らが『表』に出たとしても、わしらが彼奴らを直接たたき起すことは出来ん。昨晩と同じ召喚の儀を行うべきじや。そこの娘が共に行くか、源国で召喚の術を持つ者を探すしかないじやうつな」

「ほつほうなるほど。で、姫さんはどうすんだい?」

鼻をほじりながらワリオにうるさいられ、ピーチは少し言葉を詰まらせた。

自分はこのキノコ王国の気高き姫。自分の意志だけで勝手にこの国を離れることは絶対に許されないこと。特に、執事であるキノじいは、遠い異国への彼女の外出を決して許さないだろう。

クッパは、方法はともかく、四聖獣の敵である黒金大蛇に乗っ取られている。彼の目的は四聖獣だけなので、今のところ彼に自分が狙われる心配はない。しかし、今やピーチの敵はクッパひとりだけではないのだ。

しかし、自分は四聖獣の魂を呼び出す術を持つている。それに何より、これは彼ら4人にとって、きっと危険が伴う旅になる。

彼女自身の立場として、これを放つておくことはとても出来なかつた。

「出来ればついて行きたいですが……私は」

「ついて行きたい？ そうじゃねーだろ、ついて来いよー。どれだけ広いか分からん王国でたつたひとりを探し出すなんて面倒なこと、俺はごめんだぜ」

「ええ、私個人としてはそうしたいのですが、私にはこの国を治める責務がある」

「ん？ おい！」

立場と私情との間で揺れる彼女の言葉を遮ったのは、今までつまらなそうにバルコニーの向こうを眺めていたワルイージの声だった。

「あっち、確かクッパの野郎が飛んでった方向だよな。そっちから

何か来る!」

「まあ、本当ですか?」

「ただの鳥なんじゃねえのかあ?」

「む? ……もしや!」「

彼の言葉を聞き、聖獣らの顔色がさつと変わる。ふたりはすぐにバルコニーに駆け寄り、ワルイメージの示した方向をじっと凝視した。やがて、ふたりの顔つきが険しくなる。紅朱雀が、小さく「やはりな」と呟いた。

「これで、小娘は我らと行かざるを得なくなつた」

「そのようじや。黒金大蛇め、小癪な真似を!」

「おいおい、何がどうなつてるんだよ?」

「器ども。呆気にとられている暇があるならば、構えろ!」  
ふたりが、ワリオらのほうを振り返る。

その顔は、どこまでも真剣だった。

「敵襲だ!」

To be Continued .

？ 敵襲

紅朱雀のその言葉に、誰もが驚愕した。

「敵襲だつてえ！？」

そう叫びながら駆け出したフルイージの言葉に、ワリオとピーチも弾かれるようにバルコニーに駆け寄つて、そちらの方向をじっと見つめる。

やがて、こちらにまつすぐ向かつてくる集団を見つけ、思わず3人は声を失つた。

「……なんという大群ですか」

「多すぎだろ、いくらなんでもよお……」

「姫さんだけでも逃がした方がよくねえか？」

唖然とする3人。普段は怖いもの知らずであるワリオとフルイージだが、こればかりは流石に腰が引けた。見る限り、ざつと100匹以上はいるだろうか。敵襲、と聞いてわずかに湧いた闘志がへなへなと音を立ててしほんでいく。

そんな彼らを、紅朱雀は意地の悪い目つきでじろりと睨み、煽るように鼻で笑つてこう言つた。

「何だ貴様ら、そのような情けない顔をして。もしや、怖気づいたか？」

「あんだとう！？」

「貴様らの力を見てみよ。まあ、我らには足元も及ばぬだろうがな」

「敵勢力の前でつまらんいがみ合ひはやめぬか」

翡翠白虎にたしなめられ、むつとしたように紅朱雀は顔をしかめる。どこか子供っぽいその表情は、その肉体だけに、普段のマリオにとても良く似ていた。

やがてそんな顔も、ぐつと引き締まつた凜々しい顔になる。それにつられて翡翠白虎も同じような表情になる。これも普段の兄弟と

よく似たものだつた。

ふたりが、颯爽とバルコニーのフェンスの上に飛び乗つて。

「さあ、来るぞ！」

翡翠白虎の言葉に応えるように、『マリオ』の背中には、先程クッパとやりあつた時と同じ赤い翼が、突如としてぱつと現れる。きらきら光る赤い火の粉をまとつた翼。こんな時でなければ、誰もが言葉を忘れて見とれる美しさだつた。

そして、彼と同じように。

翡翠白虎の両手首・両足首に、澄んだ緑色の雷が、腕輪のように現れて。ひと際強く光るその4つの輪から、更に何本もの稻妻が『ルイージ』の体をまとい、バリアのようになつていくのが見えた。両手の指を、力を確かめるように何度も握つたり開いたりした後。翡翠白虎は、ぐつと上半身を低く下げる、獣のような構えをとつた。そう、まるで猛々しい虎のよつな。

もうすぐそこまで迫つて来ていた敵軍勢を見上げ、面白そうに紅朱雀は言つた。

「先ほどは器に邪魔をされたが……器の力を試すいい機会だ。軽い小手調べと行こうか」

「これが小手調べだあ！？ あんたら命知らず過ぎるぜ、いくら神サマだつつてもよお」

ワルイージが思わず非難めいた声を上げる。その言葉にわずかに反応を見せたふたりは、ちらりと3人の方を振り返る。

何も言わずにどこか悲しげな表情を見せる翡翠白虎を尻目に、紅朱雀は皮肉めいた笑みを浮かべて言つた。

「命知らず、か。ふん、面白い事を言つ

「我らは人間に滅ぼされた身。命などとつにないわ」

一瞬、耳を疑う。

「……あんだけ？」

ワルイージが聞き返そつとする間もなく、ふたりはフェンスを蹴つて宙に舞つた。

赤い炎、緑の稻妻。

二色の光が敵を次々となぎ倒していくのを、3人はただ呆然と眺めていた。

時折ふたりが取り合ひした、ほんの数匹のわずかな敵を、ワリオかワルイージのどちらかが殴り倒す以外は、彼らの出番はほとんどなく。

「……強えーなあ、あいつら。いつもあいつらじゃねえみてえだ」いくらかの時間が過ぎた時、ワリオはどこか退屈そうに、唇を尖らせてこう呟いたのだった。

「まあ、いつもの彼らではありませんもの。オリエント王国の摂理を統治する神々が、マリオとルイージに憑依しているわけですから」普段の彼らが使う力ともうまくリンクしているようです、と、ピーチは心から感心しつつふたりに言ひ。説明のようなその言い回しに、ワリオは「んな事あ今頃言われなくたって知ってるよ」と、再び不機嫌そうに唇を尖らせた。

「でも」

ふたりに聞こえないように、ワルイージは小さく呟く。

ふたりが意識してこの話題を避けているのは分かつていたし、それに今この話をしてしまつたら、何となく嫌な雰囲気になりそうだつたから。

「神様の癖に、人間に殺されちまつたんだよなあ」

だから、人間である自分たちに対して、あんな高圧的な態度をとるのだろうか。いちいち自分たちに突つかかつて来る理由も。そう考へると。

(……面白くねえなあ)

紅朱雀が少しだけ明かした事実に驚いたのは、なにもワリオらだけではなかつた。

それは、神の意識に自分の意識を追いやられ、心の奥まで押し込められ、肉体を通じてその様子を見聞きしていた彼らにも、同じ事。「あいつ、人間に殺された……そう言つたな」

「だからボクらに対して、あんな偉そうな態度をとつてるのかな。

……翡翠白虎は気さくな神様みたいだけど」

どうやら彼らに憑依されると、器同士であつても、声に出さない意思疎通が出来るようになるらしい。

紅朱雀と翡翠白虎の戦いの邪魔をしないように、マリオとルイージはなるべく声を潜めるように集中して、そんな会話をしていた。「いろいろ事情がありそうだね」

「オリエント王国つーところに行けば、何か分かるのか?」「だつたらいいんだけどね……つツ！？」

「ルイージ！？ どうした！？」

会話を遮つて突然苦しみ出した弟の声を感じ、マリオは思わず声を荒げる。

くぐもつた声をあげつつ、ルイージはかすれた声で兄の声に応えた。

「く……い、今、突然脇腹辺りに衝撃が……いたた」

「何つ？」

精神の中にも敵がいるのだろうか。兄弟の間に緊張が走る。と、すかさずそこに、翡翠白虎の声が降つて來た。

（すまぬ、避けきれなかつた。大事ないか？）

戦闘中だからだろうか、その声には荒い息が混じついていた。まだ本調子じゃないのかな、と、ふたりは薄々感じた。

「だ、大丈夫だよ。今のは一体？」

（憑依する我らと憑依される貴様らは、互いにすべての感覚を共有し合つのだ。それはもちろん、我らが痛手を受けた時も同じ事）

「あんた達がダメージを受ければ、オレ達もその分だけ同じダメージを受けるってことか？」

(左様じや。そしてそれは、そなたが表に出でている時も同じじや。痛手を受けすぎれば我らの意識は消えてしまつ。そなたの命も保障出来ん)

命は保証できない。その言葉で、自分が今異國の神と一体になつていることを実感し、ふたりは少しだけ背筋がぞつと寒くなるのを感じる。

そこへ、紅朱雀がぴしゃりと力強くはっぱをかける声を降らせた。(や、無駄話をするでないぞ翡翠白虎!)

(おつと、その通りじゃつた)

そんな威勢のいい会話が聞こえたきり、突然ふたりの声はぱつりと途絶えてしまった。

「つて、ちょっと？ もうおしまい！？」

「あーあ。回線が切れちまつたらしいな」

「……回線つて、電話じゃないんだから」

まつたくもう、と、呆れたよつなため息混じりの声が聞こえてくる。もう苦痛の色はないようで、マリオはほつと息をつく。

「さてと」

誰にともなくそう声を上げ、マリオは目の前の光景に視線を移す。異国の神々が見ている光景を、自分の肉体の中身に押し込められながら。

「あいつが解放してくれるまで、高みの見物といくかあ

ルイージの体を借りた翡翠白虎を傷つけた一撃は、外界で戦いを見守る3人もしつかり目撃していた。

「今、ルイージに攻撃が当たつてしましましたが……！」

「結構深く入つたぞ、今。平気かよ」

さつと青ざめるピーチと、柄にもなく心配そうな様子のワリオ。

「まあ平氣だろ。あいつ、案外不死身だぜえ」

それはお互い様だらう、といつセリフはあえて言わない事にする二人であった。

赤い炎と緑の電撃を浴び、最後の一匹が地面目がけてまっさかさまに落ちていくのは、間もなく。

飛び立つた場所と全く同じ場所に、ふたりは軽やかにすとんと降り立つ。

小さく息をついて、紅朱雀は満足そうに呟いた。

「初陣にしてはまずまずだつたか」

「うむ。犠牲者なしの勝利とはいゝものじや」

「犠牲者つて……胸糞悪いこと言つんぢやねえよ」

思わずワリオが顔を歪める。ワルイージが憮然と顔をしかめ、ピーチも悲しげに瞳を伏せる。

そんな3人の様子に、翡翠白虎は申し訳なさそうに苦笑いしたが、紅朱雀は相変わらず涼しい顔だった。

「貴様らは我らが生きてきた時代を知らぬ。だからそのよつな軽々しい事を言えるのだ」

「これ、紅……」

「私は疲れた。しばらく休む」

翡翠白虎の叱責を遮り、そう言い捨てた紅朱雀は、ふいにすっと目を閉じた。

ふわり、と、一瞬だけ、『マリオ』の体を赤い光の膜が包んで。

「……ふう……戻つたか」

再び開いた青い瞳は、いつものつぶらな瞳だった。3人の口から、安堵の息がもれる。

「ああ、マリオ！」

「姫。ご心配をお掛けしました」

「申し訳ございません、このよつな事になつてしまつて」

「姫のせいではありませんよ。どうかお気になさらず」

お互いを気遣いあつマリオとピーチの様子を見て、翡翠白虎は目

を丸くした。

「ほう！ 紅朱雀の中では粗暴な雰囲気じやつたが、そのような礼儀正しさも持ち合わせておるのか」

「……粗暴で悪かったな」

「けつけつけ。そぼうだつてよー」

「お前の方が大概だらうが……つかそばほりじやなくて粗暴だ……」

「いこぞー、もっと言つてやれ兄貴ー」

けらけら笑うワルトイージ、呆気にとられるペーチ。そんな様子を見て小さく笑うと、翡翠白虎は言つた。

「敵襲前も言つたが……黒金大蛇を追つて源国に参るのならば、やこの娘も連れて参るべきじや」

「え。ひ、姫も？」

「わしも紅朱雀も、完全に復活したわけではない。小金玄武と紫苑青龍に至つては、田覚めてすらおらぬ。源国にある我らの墓の前で、再び降臨の儀式を行わねばならんのじや。しかし……」

一瞬だけピーチのほつをひりつと見てから、再び翡翠白虎は口を開いた。……どいか、躊躇するみつて口ひもつてから。

「今宵のような敵襲は、恐らくこの国だけではない。降臨祭はどこの国でも行われているものじやからの。恐らく我らをこれ以上田覚めさせぬよう、黒金大蛇は世界中にあのような魔物を放つておるはずじや。『呪喚の儀』の術を持つ者のみを狙つよう命令してのう」

「何だつてー?」

「そ、それでは……ーーー」

話が見えてきた。しかしそれは彼等にとつて、まさに想像を絶する悲劇。

それを承知の上で、翡翠白虎は悲しげに顔を歪め、真実を告げる。「ほとんどは根絶やしこれどるはずじや。生き残つた者と……数は決して多くない。探し出すのは骨が折れるじやろつた」

思わず4人は言葉を失っていた。

彼等・四聖獣を目覚めさせない為に。自分たちが戦っている間に、すでにそこまでの手を回していったなんて。

自分たちの知らないところで、大勢の人が戦い、傷つき、死んで行くなんて、そんなの。

「……なんて」と。酷い……

「そなたのような高貴なるお方に、こんな惨たらしい話をしてもほんにすまん。しかし、事実じゃからのう」

顔を手で覆つて涙ぐむピーチに向かつて頭を下げ、本当に申し訳なさそうに謝つたその直後。

「マリオらのほうを向きなおり、真剣な表情で翡翠白虎は言った。  
「じゃから、そなたは彼女の傍らにいて、常に守れ。指一本触れさせることないぞ」

「ルイージの姿で言われるつてのが、なんだか複雑だが……」  
少しだけ苦笑いを浮かべてから、きりつと表情を引き締めて。大きくマリオは頷いた。

「そんなこと、あんたに言われなくとも分かってるさ」

彼の言葉に応えるように、翡翠白虎も頷き返す。そして、やれやれ、と大きく伸びをした。

「わしもちつと疲れたのう。器の中でしばし休息させていただくぞ」「おうおう。とつとと緑野郎に戻りやがれってんだ」「はつはつは、口の減らない奴らじゃ。ほんに面白い……では、また何かあれば出てくるからのう」

「ルイージの悪態にひるむことなくカラカラと笑つて、そう言い残し。翡翠白虎も目を閉じる。先程のマリオと同じよう、「一瞬だけ緑のベルルがルイージの体を包んで。

やがて、今までその場にしつかりと立つていたルイージの体が、糸が切れたようにへなへなと崩れ落ちた。

「ルイージ！」

「大丈夫ですか！？」

「はあ、はあ……憑依つて疲れるんだね」

肩で大きく息をしながら、ルイージは脂汗まみれの顔を上げる。その表情は苦しげだつたが、どこか晴れやかないいつも通りの弟のもの。思わず、マリオはほうっと安堵のため息をつく。

やがて、ルイージと視線を合わせるように屈んで、彼の肩を掴んで。今にも泣きそうに顔を歪め、マリオは口を開いた。

「……馬鹿。さつきは無茶しやがつて！」

「う、う、うめん。あの時は夢中だつたんだ。……だけど」

少しひくりと肩を震わせ、それから申し訳なさそうに顔を伏せ。悲しげに唇をかむルイージ。

それから、ぱつと顔を上げた彼は、いつしかマリオと同じ、怒りを含んだ険しい顔をしていた。

「でも、無茶をしたのは兄さんだつてそつだよ！ 深く考えないで紅朱雀を受け入れようとして！」

「ぐつ」

「さつき叱つたから、これ以上は言わないけど。ボク、もつと兄さんの力になりたいよ」

いつつもお留守番ばかりなんだもの。そう肩をすくめて見せると、マリオも同じジョスチャーをして見せた。

やがて、ゆつくりとふたりはその場に立ちあがる。

大きく長い溜息をついて、ルイージが唐突に口を開いた。

「それにしても、疲れたなあ。ダメージがリンクする分、負担も大きいみたいだし」

「あまり長い時間、ふたりが表に出てない方がいいのかもしけねえぞ。こいつ、いつかぶつ倒れるんじゃねえの？」

「それはあいつらの気分次第つてやつか」

「気まぐれみてえだしなあ、紅朱雀とかいう赤い神さんは」

あとの3人も口々に言つ中、今までずっと目を伏せて考えていた

ピーチが、不意にぱつと顔を上げて口を開く。

その表情は、力強く気高い気丈さにあふれていた。

「マリオ、皆さん」

「ああん?」「

「は、はいつ」

「何でしよう、姫

しつかりと話を聞く体制を作るマリオとルイージ。面倒くせそうに振り向くワリオとワルイージ。

そんな彼らの顔を見まわし、彼女は口を開く。

「こんな私でよろしければ……」

一緒にお供させて下さい、と言い終わるより前に。

「あの神さんと約束しちまったからな。今更『一緒にに行けませんわ』とか言われても困るっての」

「兄さんだけじゃなく、ボクらもついてます。あんな訳の分からない奴なんかに、絶対手出しさせません!」

「姫さんは姫さんじしく、しゃんとしてりやあいいだり

「えつ……」

自分が何かを言つより早く、矢継ぎ早に3人にまくし立てられて、ピーチは目を白黒させる。

そんな彼女の前に、一人マリオが歩み出て。

彼は突然。恭しく、ピーチの足元にすつとひざまづいた。

「オレたちに、あなたを守らせて下さい。姫

「マリオ……」

「今の翡翠白虎の話を聞いて、より一層今回の事の重大さを思い知りました。この国にとつてもオレたちにとつても、あなたは絶対に必要な存在なんです」

ルイージも、兄の言葉に同意するよう大きく頷ぐ。

ワリオとワルイージは……どこか神妙な顔で、マリオの話に耳を傾けている。

「だから、絶対にオレたちの側を離れないで。一緒にオリエント王

国に行きましょう」「

「……ええ。ありがと」「

少し涙ぐんだ瞳を細め、ピーチは満面の笑みを浮かべた。  
雰囲気が少しだけ和やかになりかけた時。

「あああっ！－！」

いきなりそんな空気をぶち破ったのは、ルイージの素つ頗狂な叫  
び声だった。

「びびび、びっくりせんnaアホ！　いきなりでけえ声出してんじ  
やねえよ！－！」

「ご、ごめん。でも、大変なこと思い出しちゃったんだ！」

「大変なこと？　何だそりやあ

眉を潜めるライバルらとは対照的に、マリオとピーチは彼の言葉  
を聞いて、途端に険しい表情になる。

「ルイージ、まさか！」「

「うんっ」

マリオの言葉に大きく何度もつづなずいて、ルイージは兄に向かつ  
て訴えかけた。

自分とごく親しい間柄にある、『彼女』を想つて。

「サラサランドは……デイジーは大丈夫かなー？」「

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5571m/>

マリオ・オールスターズ・レジェンド 【四聖獣伝説】

2010年10月14日18時55分発行